

## 中世語雑記(第三)

—— 短材截端・出藍 ——

### 6、短材截端

古文書を読んでいる時、思いがけないことばや表現を見出して、そこからことばの流れに新鮮な展望がひらけ、知的関心をかきたてられると共に、古代の人々の喜び悲しみが身近に感じられることがある。言語史に関心のある者の持つ読書の楽しみの一つといえよう。

日本の古代文学の資料は有限で、注釈や語彙索引も整備せられてきたので、今さら新発見など期待しても無駄というものである。だが、古文書には何かありそうな気がする。制約はあるものの、量の多さは実に魅力的である。

『鎌倉遺文』第十一巻に次の文を見出した時は、思わず目を見張ったことであった。

なに事もく、思ひくゝのさたとみへて候也。所所よりの官駄もそのゆくゑもしらず候。せばき物の、はしをきるらんやうと

山内 洋一郎

こそみへて候へ。なに事もためしなくみへ候也。

長専(?) 書状 下総中山法華経寺所蔵文書

この「せばき物のはしをきる」は、『万葉集』巻五にある山上憶良の有名な長歌「貧窮問答歌」の一節を思い起させる。

父母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に 囲み居て 憂ひ吟  
よひ 竈には 火気吹き立てず 飯には 蜘蛛の巣かきて 飯  
炊く 事も忘れて ぬえ鳥の のどよみ居るに いとのきて  
短き物を 端切ると 云へるが如く 楚取る 里長が声は 寝  
屋処まで 来立ち呼ばひぬ かくばかり すべなきものか 世  
の中の道

寒気を防ぐすべなく、飢渴に苦しむ庶民に、更に里長の苛酷な徴用の声が響く。「短き物を端切る」は、同じく憶良の「沈痾自哀文」にいう「短材截端」と同じで、つらい上に更にひどい仕打ちをする意の諺であったようである。

是時年七十有四、鬢髮斑白、筋力尪羸、不但年老、復加斯病、  
諺曰、痛癢灌塩、短材截端、此之謂也。

「泣き面に蜂」は具体的情景を思い浮べることはできるが、果して実際にそういう場面があるだろうか。わかりやすい比喻ではあるが、ユーモラスな印象も随伴して、切実感に乏しい。これに対し、「短き物を端切る」は、具体性に欠けるように感じてそうではない。どのように応用しようとも、鮮明な印象を与える。憶良は、老令による衰弱に加うるに病氣による呻吟という状況に用い、また、人としての最低限の生活の辛苦と、為政者の酷薄な圧迫にひしがれる庶民の姿の描写に用いた。

この「短き物を端切る」は妙に突き刺さることばとして心に残っていた。注釈書にいう「当時の諺」に文句を付けるつもりはないけれども、この、時によっては、人間の悲哀を鋭く出し尽すことばが、奈良時代だけで消え去るとは思われなかったのである。平安時代の文献に出てこないのは、公卿や女房たちに無縁のことばだったのかもしれないし、或いは単に作品の中に用いる場面がなかったからかもしれない。とにかく見えなかった。それが、鎌倉時代の僧の手紙に出てきたのである。

この手紙の宛所は不明であるが、法橋長專の他の書状から見て、法華經寺第一世の富木入道常念であろう。富木常念は日蓮の有力な外護者として知られ、この書付として推

定せられている建長六年（五四）は、日蓮が鎌倉布教を始めた年である。

長專がこの手紙で報じているのは、（東国から）上京して見た京の無法状態であった。恐らく借錢の取立てに追われて調達に來た長專に「錢一文もさたしかへされず候へば、仰天して候也」という対応であったし、京の人々の様子は、官駄も消え失せるように、私利私慾の無法状態に彼には見えた。文意確かには理解しがたいが、「狭き物の端を切る」は乱世の力ある者が弱者をいためつけるさまを喻えている。「狭い」は左右から圧せられて小さくなっているさまで、ひけ目ある者には「世間が狭い」と使う。「狭き……」でも十分に通用する。

奈良時代の孤例かと思えた「短き物の端切る」が五百年余の後に姿を現すことは、私には大きい驚きであった。それは、悲しいことに、この諺を使わねばならない状況が連々と継続していたからであろう。それを思えば、それ以後も残っていたらうと想像される。「それ以後」とは果していつまでであろうか。

右は奈良教育大学図書館報附録「書想」第45号（昭和54・11）に載せた短文である。随想の文体ではあるが、中世語雜記の一つと言えないこともないので、ここに再録した。

## 7、出 藍

「出藍の誉れ」という語句がある。この源になる成句を、私はいつからか「藍は藍より出でて藍よりも青し」と覚えていた。これが『荀子』の勸学篇を出典とし、「青は藍より」というのが正しいと知ったのは、かなり後のことである。

その漢文を、この句の本邦の書に出る最初と思われる源為憲編『世俗諺文』上巻（観智院本）によって、掲げてみよう。

青<sup>シヨリモ</sup>於<sup>ニ</sup>藍<sup>ニ</sup>

孫卿子<sup>ケイカク</sup>云、学<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>以<sup>ハ</sup>已<sup>ハ</sup>。青<sup>キョト</sup> 取<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>藍<sup>アキニシヨリモ</sup>而<sup>ニ</sup>青<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>藍<sup>ニ</sup>。氷<sup>ヒナテ</sup>生<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>水<sup>ニ</sup>

而<sup>サムシ</sup>寒<sup>ヨリモ</sup> 於<sup>ニ</sup>水<sup>ニ</sup>。△声点省略△

よく見れば、「取之藍」とあって、「出於藍」とはなっていない。この句の採られたもう一つの金言集、鎌倉時代の藤原孝範編『明文抄』巻五文事部にも同文で載せられていて、ここにも何か事情がありそうである。

また、『荀子』の原文をその文脈に沿って見るとき、弟子が師に勝ることと限定できないのではないか、という疑問は、吉田正美氏などにより提出せられており（後に検討する）、この成句がひとり立ちして変貌したのでないかとも思

わせる。日本において『荀子』が必ずしも重視されなかったことを考え合わせると、「出藍の誉れ」に至る流布の過程が果して直接『荀子』からという一元的なものであったかどうかとも疑えないこともない。

こういう疑問の解決への調査は、「青於藍」という一句を対象としていても、中国起源の金言成句の日本での受容と流伝という、文化史的大主題の一実践という性格を帯びてくるので、まことに容易なことではない。今は手許の僅かの用例をもとに、解決へ向けて一步を進めることとした。

まず「出」字の点について、諸橋轍次編『大漢和辞典』の「出藍」の項では、「群書治要は青取<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>藍<sup>ニ</sup>に作り、宋本及び困学紀聞も、青取<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>藍<sup>ニ</sup>に作り、元刻本は青出<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>藍<sup>ニ</sup>に作る。王先謙の荀子集解は取の字に従ってゐるが、此の語は出の字に従った本から出来たのである。」と説いている。「出藍」の例文は挙げていない。同辞典「青」字の項に引く『太平御覧』（百廿、藍）に「孫卿子曰、青生於藍、而青於藍」とあり、「出」の本文は宋代には存し、この書もすぐに舶載せられている。更に古く唐、馬總編『意林』所収引用句も『芸文類聚』の句も「出」となっているが、これら諸書の、『荀子』自体を含めて、成立時の形態、異本状況などどうなっているのだろうか。そこまで調査する余裕がない。『荀子』では元来「取」であったのが、音の近

似の故もあつてか、後に「出」に変わったように思われる。「出」の本文の句も平安朝も後期には我国に入つていたやうで、たまたま『弘決外典抄』<sup>(1)</sup>卷一に「書云青出於藍而青於藍、染使然也」とあるのに気付いたが、これは劉子『新論』の引用であらう。崇学篇に右の句があり、下に「水生於水、而冷於水、寒使然也」と続く。『新論』の成立年次は未詳のようであるが、唐以前のやうで、とすれば、「出」を持つ句は相当古いともいえる。

右と同趣の句が他にもある。

青<sup>サンハ</sup>彩<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>藍<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>質<sup>ニ</sup>、青<sup>ゴトハ</sup>於<sup>ニ</sup>藍<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>教<sup>ニ</sup>使<sup>ニ</sup>然<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup> 史記

尊經閣本、玉函秘抄 下

『史記』卷六十、三王世家の褚少孫の補記の部分に「伝曰」として引く文で、これも「出」である。伝藤原良経撰の『玉函秘抄』には『荀子』の句はなく、右が載り、この句は『明文抄』にも採られている。

『淮南子』倣真訓の「今以<sup>ニ</sup>涅染<sup>ニ</sup>緇則黒<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>涅<sup>ニ</sup>、以<sup>ニ</sup>藍染<sup>ニ</sup>青則青<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>藍<sup>ニ</sup>、涅非<sup>ニ</sup>緇也<sup>ニ</sup>、青非<sup>ニ</sup>藍也<sup>ニ</sup>」(『大漢和辞典』引用) という句を見れば、先ず『論語』陽貨篇の「涅而不緇」を想い起すのであるが、『淮南子』が『論語』を引用したとはいえないものであつて、古代中国で「涅——緇」の組合せがしばしば比喩的に用いられたことを示すものであるやう。同様に「青——藍」も荀子の創始した言句ではなく、往古に通用した比喩ではないかと思われてくる。そし

て、『荀子』の本文としては「取」から「出」へと推移したといえようが、通用した比喩としては必ずしもそうはいえず、本来「出」であつたかもしれない。いずれにしても、私の断言でできることではない。

このような諸書が時を異にして日本に入つたのであらう、その道筋は単純には受け取りにくい。

日蓮の弘安二年正月三日上野殿宛書状は次のように述べて終っている。

……こうへのどのをこそいふあるをとこと人は申せしに、其御子なれば、くれないのこきよしをつたへ給ふるか、あいよりもあをく、水よりもつめたき氷かなと、ありがたしく、

恐々謹言

餅九十枚、薯蕷五本を贈られての礼状で、貴殿は故父君より勝るとも劣らぬ情理ある人だと賞揚したのである。訓読は微妙な問題であり、話者が部分の取捨、変更をすることもあるが、一往指摘すれば、「水よりもつめたき」は「寒」とある『荀子』よりは「冷」の『新論』に近い。

昔ヨリハ次第第二衰ヘモテ行ニツケツ、道々ノ才藝モ、又父祖ニハ及ビガタキ習ナレバ、藍ヨリモ青カラン事ハ、マコトニ希ナリトイヘドモ、如形ナリトモ貧賤ノ業ヲツガザラム、口惜カリヌベシ。

十訓抄、第十八御所本

右は道々の家に生れた者の勤めるべきを論じており、父祖の業を継ぐのに「藍ヨリモ青カラン事ハマコトニ希ナリ」

という。日蓮書状と同じく、父子間の例である。師弟間に用いる我々の通念から見れば、異色の感があるが、管見のところ、弟子が師にまさることという例は、南北朝に入って見られる。

「藍あゐより出あて藍あゐより青あをく、水より出あて水より寒さむし」といふ事であれば、末すゑの世にも如何にか成行侍らずらん。「恐おそるべきは後世なり」と申ことの侍るにや。 筑波問答へ古典大系

二条良基は、救済が師の善阿よりもすぐれていたことを述べ、この成句を用いて、更に近似の句「後生可畏」で締め括っている。

このように師弟間に用いる例が後れて見えるのは偶然だろうか、用例の探索不足の為だろうか。

ここでこの成句の意味に論点を移してみよう。荀子はその著の冒頭で、「君子曰、学不可已」としてこの句を引いている。学問の絶えざる努力を強調しているのであって、所謂「出藍の誉れ」の含義とはそのまま同一ではない。この疑問を契機に考察をしたものに、吉田正美氏の「故事成語を見なおす―出藍・蛇足・助長をめぐって―」<sup>3)</sup>がある。吉田氏は諸辞典にあきたらず、明、萬曆二年刊の『故事統宗』など、中国近代刊行の故事成語辞典十二種を調査し、『荀子』と共に『北史』李謹伝の重視されていることを見出し、ここに弟子の師より優れることという含義の顕現を

見たのである。それは、こういう話である。後魏の李謹は初め孔璠に師事した。その学業の著しい進歩を見て、孔璠は後に謙虚に教えを請うた。同門生はそれを知って「青成藍、藍謝青、師何常、在明經」と歌った、と。

この話は、知らなかった私には興味深いものであった。荀子は「学不可已」といい、「君子博学而日参省乎已、則知明而行無過矣」といい収めていて、先哲の言行を良く学ぶことを説いているのであって、師とは限定していない。『北史』によって師弟間の含義が出てくるのである。しかし、これをもって出典と呼びうるかとなると、疑問である。我国の先人がこれを知りつつ等閑に付してきたのは、『荀子』の句がそのままには使われていないからであろうし、『北史』もどの程度に読まれたのだろうか。

後魏の李謹の故事が、この成句の師弟間に用いられた中国での最初かどうか、確実ではない。時のかなたの事なので何とも言いようのないことである。ただ、その傾向のあったことは唐代に「出藍」ならぬ「青藍」の語があったことで知れる。

三蔵、風儀温雅、神機朗俊、負笈從師、研精累歳、器成、瑠玉、学檀、青藍、華嚴經伝記第一、第三

これは東大寺図書館所蔵『華嚴經祖師伝』建治二年写本を讀んでいて気付いた文である。『華嚴經祖師伝』は、『華嚴經伝記』『宋高僧伝』などにより華嚴宗の祖師の伝を集

成したもので、宗性僧正の編かと思われる書である。右の部分は『華嚴經伝記』よりのもので、訓点は東大寺本のを移しておいた。

「青藍」なる語は、『大漢和辞典』に引例がなく、『日本国語大辞典』に江戸末の『蘭東事始』下の「青藍の器」を引くのみであるが、してみると、高僧伝の類に他にも存するのではなからうか。『華嚴經伝記』は唐の法蔵三蔵の編、同様の高僧伝は唐・宋、さらに時代を下って多く編纂せられ、禅宗の時代にも盛んであった。

禅僧の間でこの成句の用いられたことは、『禅林句集』に載り、その「出所付」と標する手許の江戸末の刊本で『虚堂録』巻一を指示していることでもわかる。『虚堂録』を見る。

愚云我会也、宗云道来看、愚擬開口、宗又打師云、是則青出於藍而青於藍、若其交鋒之際、冰生於水寒於水、則未可也、

卷一、顯孝

ここにも師弟の間の用例を見ることが出来る。だが、常にそうかといえ、他の用例を知らないながらも、慎重にせねばならないだろう。『句双紙』にも載り、その注である『句双紙抄』では、そういう含意を示していないからである。

アラクモリモアイスサマシモ  
青<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>藍、冷<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>水、藍ホド青イ物ハナイガ、ソレヨリモ青イ也。水ホドスサマジイ者ハナケレドモ、ソレヨリモスサマ

ジイ也。句中ヲ云ナリ。

明暦二年版

この句が謡曲で用いられているのを見るに、汲む水の清冽を強調するのに用いるに過ぎず、僅か「いやまさり」に意味を響かせている。

「それこほりは水よりいで、水よりもさむく、青きこと藍より出で、あるよりふかし」本のうきみの酬ならば、今のくるしみ去りもせで「いやまさりする思ひの色」「くれなるの涙に身をこがす  
桧垣八古典全書、車屋本V

檜垣の姫の水汲みに合わせて「氷は……」を前に置いている。抄物では

文花スギテ質朴スクナキハ、史官ニ似リ、史官ノ物ヲ注、千騎ヲ二千騎トシルシ、五千騎ヲ一萬騎ト書テ、藍出テ、藍ヨリモ青云ナス、  
応永二十四年本論語抄 雍也

数量を過大に云うのに用いて、これでは誤用でしかない。こういう例が出てくることは、この成句が師弟間に固定されていなかったことを示すものであろう。

ここまで考えを進めると、次は江戸時代に入らねばならない。林道春の『童観抄』はさすがに「荀子云」と明記して、師弟間の意味を説いている。渡辺守邦氏の翻刻によって、その本文を示そう。

荀子云。青<sup>キ</sup>出<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>藍<sup>ニ</sup>而<sup>シ</sup>青<sup>キ</sup>於<sup>レ</sup>藍<sup>ニ</sup>。氷<sup>ハ</sup>水<sup>ヲ</sup>為<sup>リ</sup>之<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>寒<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>水<sup>ニ</sup>。

青<sup>アヲ</sup>色ハ。藍<sup>アヲ</sup>ヨリ出レトモ。藍<sup>アヲ</sup>ヨリモイヨク青<sup>アヲ</sup>シ。氷<sup>アヲ</sup>ハ水<sup>アヲ</sup>ヨリ出レトモ水<sup>アヲ</sup>ヨリモサムシ。学問シテユタンナクツトムレトモ。弟子モ師匠ニマサレリ。

この解は禅林でも見られた。元禄三年版『句双葛藤抄』は次のようである。

藍<sup>ハリ</sup>自<sup>リ</sup>藍<sup>シ</sup>出<sup>テ</sup> 自<sup>リ</sup>藍<sup>シ</sup>青<sup>シ</sup> 同シ師ノ接処下ヨリ出デ、モ見地ガ師ニ過ギタゾ。

時代が下って漸く解が落着いてきたのであろうか。江戸時代についてこれ以上の詮議はできないのであるが、まだ「出藍」の語を見出せないのである。

ところで、『句双葛藤抄』の文をよく見ていただきたい。「藍ハ藍ヨリ出デテ」とあるのである。私の幼時の口ずさみは根拠のないものではなかった。寛永十五年成の『毛吹草』では初語を欠いて「あゐよりいてゝあるよりあをし氷<sup>こほり</sup>はみつよりいでゝみづよりさむし」とあって、決め手はないが、実はもう一種例を見出している。

イヤトヨ、藍ハ藍ヨリ出テ藍ヨリモ青ク、神ハ吉田ヨリ出テ吉田ヨリモタフトクサフラフゾ。 妙貞問答 中巻

『妙貞問答』は不干齊巴鼻庵の著で、慶長十年の作かといわれる。室町末期ごろに「藍は藍より……」という言い方が日本で始まっていたことを示している。同語を重ねて調子良い唱え言のようになっていたが、勿論、藍を用いて染

色することが普及し、その色を「藍<sup>あゐ</sup>色」と呼び「青<sup>あや</sup>」と区別したために、この成句に矛盾を感じ、合理化したのである。

さて、「藍は」で始まる場合を論じて、小考としては首尾が整った。ここで筆を収めねばならない。ただ「出藍」の初出の見当もつかないのが残念である。『日本国語大辞典』では、明治十年刊の田口卯吉『日本開化小史』や福沢諭吉を挙げているが、もっと早くからあったのではなからうか。そして「出藍の誉れ」は例が挙がっていない。一体どこから始まったのだろうか。教科書類かもしれない。

いずれにしても「出藍」は和製漢語であろう。章題に用いたけれども、まだ中世には存しなかったようである。

- △1▽天理図書館善本叢書漢籍の部
- △2▽『鎌倉遺文』一八巻による。
- △3▽『奈良教育大学国文』第七号（昭和59・3）
- △4▽吉田澄夫『天草版金句集の研究』（東洋文庫、昭和13）
- △5▽『時代別国語辞典室町編』の資料による。
- △6▽『国文学研究資料館紀要』第10号（昭和59・3）

（奈良教育大学教授）